



Title	ボランティア学習のカリキュラム体系化に関する研究
Author(s)	長沼, 豊
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49164
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	なが 長 ぬま 沼 ゆたか 豊
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）
学 位 記 番 号	第 2 1 7 1 7 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 20 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学 位 論 文 名	ボランティア学習のカリキュラム体系化に関する研究
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 内海 成治 （副査） 教 授 中村 安秀 教 授 前迫 孝憲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、初等から高等教育にいたる学校教育において実践されているボランティア学習のカリキュラム体系化に関する研究である。

初等・中等教育におけるボランティア学習の実践や、高等教育におけるボランティア関連科目の開講など、学校教育ではカリキュラム化された「ボランティア」が存在する。前者は各学校において教育的意図をもって行われ、学習指導要領や各学校の教育目標に照らした上で実施されている。後者においては各大学の教育理念等に根ざして科目が開講され、地域等での活動体験やボランティアについて考察する講義・演習等が行われている。すなわち、これら各々の教育実践においては、カリキュラム化された教育、すなわち教育素材として目的と教育方法を備えた体系が存在しているといえる。しかし、それらは個々の学校単位で考えられており、「ボランティア」を包括的・総体的に捉えてボランティア学習全体の体系を記したものはない。

本論文は、この点に着目し（学習素材、教育素材としての）ボランティアのカリキュラムを大きく体系づける（＝「体系化」）ための枠組みや構成要素を提示する研究である。本論文の目的は、①学校教育へのボランティアの導入のされ方を検証すること（第2章）、②カリキュラムの体系化を理念的に考察し構成要素を提示すること（第3章）、③初等・中等・高等教育のカリキュラムを分析し総体としての体系化を図ること（第4章）の3点を明らかにすることである。この分野の先行研究には該当するものがほぼ皆無であり、特に初等・中等・高等教育におけるボランティア教育を包括的に捉えたものはない。教育実践の面では、本研究の成果により、ボランティア学習の学習内容（スコープ）やその系列（シークエンス）等を可視化することで、今後ボランティア学習に取り組む教員等への指針になると考えられる（以上、緒言および第1章「研究計画」）。

第2章「ボランティア学習の現状とカリキュラムについて」では、以下の4点を明らかにした。第1に、ボランティアの定義に関する各種文献の調査結果から、その定義には多様性があることがわかった。ボランティアの概念は、社会の変化とともに変わり、一面的に捉えることはできない。そのことが、ボランティアを題材にした教育実践の多様性の一つの原因となっている。第2に、従来ボランティアの特性として論じられてきた4つの特性を批判的に検討した後、学校教育における4特性の扱われ方を捉え直した。学校教育では無償性と公共性を重視し、先駆性は学習過程に見いだしにくい状況であること、自発性は学習結果として養われるべきものという捉え方もあることなどが明らかになった。第3に、教育行政の施策として、ボランティア学習が歴史的にどのように捉えられ、推進されてきたのかを概観し、カリキュラムの体系化に関わる課題を明らかにした。教育行政の施策としてボランティア学習が顕著に

なってくるのは1990年代からである。1990年代後半は「ボランティア」として、2001年以降は「奉仕」として推進が図られてきている。両者の相違については顕在化しているとはいえない状況にある。第4に、現行の学習指導要領（小学校・中学校・高等学校）において、ボランティア学習を扱う項目の位置づけについて分析した。ボランティアといっても教育課程の位置づけによって、ボランティア精神を養うこと、活動そのものを実践すること、活動の意義を理解することなど内容が異なっていた。以上をもとに、ボランティア、ボランティア教育、ボランティア学習、奉仕活動、ボランティア活動など、学校教育で用いられているこれらの用語が曖昧なまま使われていることを指摘し、本論文での使用用語を明確にした。

第3章「ボランティア学習のカリキュラム体系化について」では、以下の5つの視点から検討した。第1に、ボランティア学習の構成要素を、ボランティア活動のための学習、ボランティア活動についての学習、ボランティア活動による学習の3種に分類し、これらが学習過程の各段階に創出することの確認。第2に、ボランティア学習の学習目的を短期目的、長期目的に分類し、各々の目的によって扱う内容（ボランティア活動のための学習、ボランティア活動についての学習、ボランティア活動による学習の3種）が変わってくることを指摘した。第3に、デューイの教育論および成人教育論におけるアンドラゴジーモデルからボランティア学習の特質を分析した。ボランティア学習では、デューイのいう「感得」が学習過程のなかで重要な役割を果たしていること（特に活動体験を含んだ過程の場合）、ボランティア学習は成人教育論の「アンドラゴジー」のモデルで説明できることを述べた。第4に、英国のCitizenship Educationにおいてボランティア学習がどのように扱われているのかを概観し、市民性に基づくボランティア学習の重要性を指摘した。すなわち、市民性を育む視点からは、ボランティア学習は、批判意識を含めた社会的課題を見る眼を養う教育になっている。そのことでボランティア活動の先駆性が具現化できると思われる。第5に、米国のService Learningの特質を概観し、アカデミックな学習との連携の重要性を指摘した。サービス・ラーニングでは、地域で必要とされる課題を題材にすること、教科学習とリンクさせることで学ぶ意欲を喚起することなどが日本のボランティア学習と異なる点である。

第4章「ボランティア学習のカリキュラム体系」は、本論文の中心となる分析を行っているが、以下の4つの視点から行った。第1に、ボランティアに関する文献（テキスト）の内容構成に関する独自調査から、ボランティア学の内容構成と類型化を探った。ボランティア学の文献（専門書）の内容構成としては「基本型」「総合型」「理念追求型」「実践追求型」の4種に分類された。第2に、初等・中等教育におけるボランティア学習実践における導入段階、振り返り段階での内容に関する独自調査からカリキュラムの構成要素を探った。導入段階の学習内容を「社会」「他者」「自己」「ボランティアへの興味」の4観点で分類した結果、「社会への気づき」「ボランティアへの興味・関心」を題材にして動機付けをしているケースが多いことがわかった。振り返り学習の学習方法を分析した結果、文章記述によるものが多いことがわかった。また活動体験を含んだ学習過程として「Preparation」「Action」「Reflection」「Celebration」が創出されたが、ボランティア活動の先駆性を生かすためには「Diffusion」段階が必要である。第3に、高等教育におけるボランティア学習のカリキュラムの考察として、ボランティア関連科目についての調査の結果から、高等教育のボランティア学習の内容構成と類型化を探った。大学、短大で開講されているボランティア関連科目の実態を全数調査から多角的に分析した。シラバス類型として科目のタイプは「活動型」「福祉型」「分野多様型」「一分野型」「理念型」「その他」の6種に分類された。第4に、以上の結果をもとにE.C. Wraggのキュービッカリキュラムをヒントにした「ボランティア学習のキュービッカリキュラム」モデルを策定し、上記で分析したボランティア学習の内容構成（学習過程を含む）をキュービックに投影することで、このモデルにおけるカリキュラムの体系化について論じた。キュービックをボランティア活動の分野、学習内容、学習方法の3つの軸で区切り、個々の教育実践の学習内容と系列を小さいキュービック（セル）の集合体として表記できることを示した。

第5章「考察と今後の課題」では、冒頭で述べた本論文の目的に即して、結論として以下の3点を見いだした。第1に、ボランティア学習のカリキュラム化の前段階として、ボランティア活動の諸相を学習要素として構成する際に、ある種の「ふるい」が存在することである。ふるいはボランティアの概念の広がりやデフォルメしないふるい、「奉仕」という側面で切り取るふるい、市民性を生かすという要素を取り入れないふるいである。第2に、カリキュラムの構成要素に関して課題が存在することである。それは本来アンドラゴジーモデルのボランティア学習が、実際には学校教育で扱いやすいようにペダゴジーモデル（教師主導型のモデル）として導入されていること、ボランティア活動のSocial Actionの側面を生かした学習として、気づきを提言したり発信したりしていくプロセスを盛り込んだものになっていないこと、ねらいの明確化や学習過程における「感得」の有無に関すること、必修教科としての導入には困難が伴うこと、学習成果を教科学習へ還元する必要性があることである。これはボランティア活動の諸相からボ

ランティア学習を構成する際に生ずる技術的な問題というよりも、ボランティアそのものの捉え方と、ボランティアと学びの目的との整合性をどのように図るかということに端を発した課題である。第3に、カリキュラム体系化から、ボランティア学習のカリキュラムを多様化する方策が模索できること、カリキュラムを過度に制度化しすぎるとボランティアの柔軟性や多様性が失われてしまうこと、したがって「ボランティア学習のキュービックカリキュラム」には、新たな内容・方法が開発されカリキュラムが多様化していく方向性と、有益と思われる特定のカリキュラムに類似化していく方向性の両者が共存していることがわかった。

末尾に、本論文の教育実践への応用の視座として以下の5点を指摘した。内容面の多様性と専門性の2方向の広がりを追究すること、価値の二項対立へのアプローチを可能にすること、3つの学びのうち「ボランティア活動についての学習」も重視していくこと、「ボランティア学習」の名称を検討すること、ボランティア学習を実践するかどうかの判断は各学校に委ねる方向で考えることの5点である。また、本研究の限界としては次の点が指摘できるであろう。まず、本研究が総論的な研究のため、個々の事例の特異性を考慮することができなかったこと、分析の対象を絞ったためボランティア学習のすべての事象を捉えているわけではないこと、高等教育のボランティア関連科目のシラバス分析を行った際、シラバスには必ずしも個々の授業における方法論は示されていないため、キュービック内の位置を特定できない場合があったことの3点である。

今後の課題としては、初等・中等教育においては、既存の生徒会活動や学級活動など生徒主体の活動を、ボランティア学習の面からどのように捉えることができるのかを検討すること、高等教育においてはボランティア関連科目の分析をさらに進め、さまざまな事例の内容分析を行うことである。さらに、ボランティア学習のカリキュラム体系化により「ボランティア学」の構造がどのように把握できるのかを検討すること等である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、学校教育で実践されているボランティア学習に関する論議を踏まえて、そのカリキュラムを体系化に捉えることを目的としたものである。

現在、学校教育ではカリキュラム化された「ボランティア」が初等中等教育においては教育的意図をもって行われている。高等教育においては各大学の教育理念等に根ざして科目が開講され、地域等での活動体験やボランティアについて考察する講義・演習等が行われている。しかしながら、こうした学習や実践の体系的な検討はなされておらず、その研究も限られている。そのなかで、本論文は、現状のボランティア学習や活動のカリキュラムを包括的に検討し、以下の点を明らかにしたものである。①学校教育へのボランティアの導入のされ方、②カリキュラムの体系化に向けての理論と海外の実践、③ボランティアに関するカリキュラムを体系的に捉える枠組み。

「ボランティア学習の導入」に関しては、これまでのボランティアの定義を踏まえて、ボランティア学習のなかでどのように捉えられているかを詳細に考察している。特に学校教育では無償性と公共性が重視され、先駆性は学習過程に見いだしにくいこと、自発性は学習結果として養われるべきものと考えられていることを明らかにした。また、教育行政の施策においてボランティア学習が顕著になってきたのは1990年代からで、1990年代後半には「ボランティア」として、2001年以降は「奉仕」として推進が図られてきている。両者の相違については顕在化していないこと等を検討している。

「カリキュラム体系化にむけての理論」では、ボランティア学習の構成要素の分類し、学習目的の分類、デューイの教育論や成人教育論からの考察を行い、海外の実践としては英国の Citizenship Education と米国の Service Learning を分析している。

「カリキュラムを体系的に捉える試み」では、高等教育におけるボランティア学の内容構成を類型化し、次に初等・中等教育におけるボランティア学習実践における構成要素が分析されている。こうした作業をもとに E.C. Wragg のキュービックカリキュラムをヒントにした「ボランティア学習のキュービックカリキュラム」を策定し、ボランティア学習の学習過程を含む内容構成をキュービックに投影することで、カリキュラムを体系化することができることを明らかにした。

本論文はボランティア学習に関する包括的な研究であり、今後のボランティア学習の研究・実践における重要な分析と考察を含み、この分野の研究に大きく寄与するもので博士号授与に値すると評価できる。